

ソシュールにおける〈質〉の問題

前田 英樹

どんな時代にも、それを口にだしたとたん旗色が悪くなり、まわりの眼が嘲笑的になる言葉というものがあるし、逆にそれさえいえば何だかたちまち威勢がよくなる言葉というものがある。これは、言語で成り立つ領域ならあらゆるところで働く統制機構なので、たぶん、機構間にはおそろしく精密な連関が隠れているのだろう。そんな連関を解明したりするのは私の役目ではないけれど、それにうかつしていると、とんでもない負債をしょいこむことになるのは、どの学問でも同じことだ。うかつしているとは、それに従わないでいることではない。そういう機構の存在に気づかずに、それに従っていることだ。

たとえば、いま〈質〉という言葉が、思想的言説と称するものなかでたいへん分が悪いことは、周知のとおり、というよりは、誰もが漠然と感じ、了解している。何かあるものの固有の〈質〉について語ってしまうことは、非常にまずいのだ。〈質〉は、いつも〈関係〉におびやかされている。質だ質だと想っていたものの根を〈関係〉が掘りくずす。とはいっても、その不安が不安のまま放置されることはないので、結局こんどは〈関係〉という言葉のもたらす安堵感がきりなく肥大する。いま、そういう状況があるといっている。「思想的」にあるばかりではなく、言葉のあらゆる領域にその水脈は広がっている。

バイとセシュエが編んだ『一般言語学講義』は、いうまでもなくこの状況を生みだすのに一役買っている。これがなければ生まれなかった状況でももちろんないが、大いに重要な役割を演じる結果になったことはたしかだ。その役割とは何だろう。たとえば英語の foot に単数の意味を与えているのは、この形態自身に内在するどんな〈質〉でもないのだから、それが示しているのは、ただ feet との対立である。foot / feet の対立から単複の意味が生まれる。この着想は、『一般言語学講義』の骨子といっている。foot というひとつの〈質〉に、単数というひとつの〈質〉が結びつくのではない。foot / feet の関係が単数と複数を同時に生む。つまり、そういう意味関係を生む。だから、私たちがひとつの性質のように思い込んでいた「単数」という意味も、じつはネガティブな関係の項、いや関係そのものにすぎないのだということになる。この本が、少なくとも言語学における関係論の樹立として働いたことは、もうまちがいのないところだろう。これが材料とした講義録にもとづいて、いかにバイ

イとセシュエが関係論、あるいは「構造主義」を再構することに不手際だったかを喧伝してみたって、大した意味はない。その種の批判じたいが、「講義」が樹立したものの発展からきているのだ。言語事象の存在、ないしは〈質〉を〈関係性〉に送り返すというイデーは、この本のなかにはっきりと誕生しているのだ。

ヤコブソンが音韻論の領域でたてた「二項対立」の原理は、いちおう言語学における関係論のひとつの頂点とみていい。おそらく、関係論は、この先へは行きようがない。Aという事象が存在するのは、非Aとの関係による。見かけ上はどんなに複雑な項目でも、慎重によりわけていけば、みなそういう対立の束に還元できる。この方法の解析力が実地であげた成果はなかなかのものであって、それが、諸科学の目を引いたわけだ。もっとも、目をつけた諸科学のほうにその地盤が生まれていなかったら、現在の状況はないだろう。たとえば、ゲシュタルト理論で図形を「地対図」の関係に還元するやりかたは、まさしく知覚における二項対立主義の現われである。

ところで、ソシュールは「一般言語学講義」という本には関わりがない。それは、ただ文献学的な意味でそういうのではなく、この本が加担することになった潮流には本質的に関わりがないという意味でだ。「構造主義」の出現など、彼には予想できたはずもない。「言語は形相であって、実質ではない」¹⁾という有名な「講義」の一句は、バイイとセシュエが書いたものだ。これは、「講義」の関係論を集約した命題だが、この「形相」はソシュール自身の草稿では「活動」なのである。「ことばはどんな現われのなかでも実質を示したりはしない。それが示すのは、ただ生理的、物理的、精神的な力が結合したり離れたりするいろいろな活動だけだ」²⁾、そういつている。

「講義」の「言語 (langue)」は、草稿では「ことば (langage)」だが、このちがいはここではそんなに重要なものではない。あらゆる言語事象は「活動」だという彼の考えは変わりはないのだ。完全に一致しているのは、「実質 (substance)」だろう。問題は、そこだ。

substance という語は、おそらく古い形而上学の用語だが、ソシュールの使いかたもその伝統からそれほど離れてはいない。彼のいうsubstance とは、「それじたいで限定されているもの」、どんな操作からも独立してそれじたいの存在を保っているものという意味だ。訳語としては、「実質」でも「実体」でもいいが、とにかくそういう存在のしかたが言語のなかでは不可能だといっている。すると、それに対置させられた「活動」は、ひとつの存在のしかたとして持ちだされていることになる。言語は活動だといっただけで、それだけでは何ごとでもない。それは、どんな性質の活動で、どんな存在のしかたをしているかが、問題なのだ。「実質」に対して「活動」をたてるには、そこを明らかにするしかない。実際、ソシュールの「言語学」は、そこを明らかにする巨大な労苦だったといってもいい。「形相」の場合はどうだろう。「実質」と「形相」の対は、もちろん極めて伝統的なものだけれど、「講義」における「形相」は、存在論的な意味合を微妙に失ってしまう。いや、それを巧妙にかき消してしま

う。私たちが「実質」だと思いついて入っているものは、じつは関係性の網にすぎない、そういうふうに入った場合の〈関係性〉は、これはもう、ものを認識する原理ではあっても、それが存在するための原理ではないわけだ。

関係論は、〈関係性〉それじたいを持ちますが、そういうものがどう存在するかについては何ひとつ明らかにすることがない。認識の原理にほかならない〈関係性〉に対して、それがどう存在するかを問うことは、どだい無理なのである。「実質」は、ソシュールにとっては、「それじたいで限定されているもの」という一種の形而上学的な概念にすぎなかったが³⁾、関係論は、それを経験される具体的な〈質〉にまで押し広げる。しかし、そのときにいえることは、〈質〉は関係性において認識されるということであって、〈質〉の存在に〈関係〉という存在がとってかわることではないだろう。

ひとつの存在概念としての実質(substance)は、私たちが現に、具体的に経験する質(qualité)とはまるでちがったものである。関係論は、はじめは実質概念の解体をもくろんでいるように見せかけながら、いつのまにか〈質〉の問題に乗りうつり、それをなしくずしにする。ところが、こうした関係論の元祖のひとりのようにいわれているソシュールを、その草稿、講義録によって読んでみるなら、そこで沸騰しているのは、言語事象の〈質〉とは何かという問いにほかならないことがわかるのだ。もちろん、〈質〉は彼の用語でもないし、特に好んで使われている言葉でもない。けれども、破り捨てられることをまったくの偶然でまぬかれた彼の草稿類が、自注につぐ自注、訂正につぐ訂正といった姿で暗示しているのは、まさに言語事象の〈質〉そのものなのだ。

それは、たとえばどんなテキストを通して現われてくるか。1894年頃の講義用メモと思われる草稿に「形態論」というのがある。ここで論じられているのは、「語」を構成する「語根」「語基」「接尾辞」といった下位単位は実在するのか、するとしたら、いったいそれはどんな実在なのかという問題だ。「形態論」というからには、そうした下位単位の何らかの結合が扱われるほかない。ポップを中心とした初期の比較文法は、まずそれを精細に記述したが、そのやりかたは、驚くほど無邪気な手順に終始している。ポップたちの発想では、ギリシア人やラテン人は話すとき「語」をいろいろに使用するのではなくて、下位単位を集めてそれを「製造」していたようなことになる。ラテン人が話のなかで *pater* (父親) というときには、彼は語根 *pa-* (庇護する) と接尾辞 *-ter* を結合させてそれを作っていたことになる。後の世代は、もちろんこういふ分析態度を猛烈に批難した。誰が話すときにいちいち下位単位で語を作っているだろう。これらの単位は、みな比較の都合上設定される抽象物に過ぎない。歴史言語学の新世代は、そういってポップたちを批難した。批難はしたけれども、下位単位を利用することはやめられはしないのだ。それがなかったら、語の形態上の比較は成り立たない。そういう批判に意味があるのかとソシュールはいうわけだ。いった

い、抽象、抽象とわめくけれど、「形態論」では何が実在なのかを、あなたたちはともに考えたことがあるのか。そこで、彼は「基準」を出してくる。ひとつの「形態」が、あるいはあらゆる言語事象が「実在的」であることの「基準」をだ。

基準。実在的なものとは、語る主体たちが何らかの度合で意識しているものことだ。彼らが意識するものがすべてであり、意識できるもののほかは何でもない⁴⁾。

すると私たちが、「語」の単位より下の形態論的単位を「意識している」というのは、はっきりしたことだ。たとえば、フランス人が *chanteur* は *chant-eur*だと知らなかったら、どうして時に応じて *graveur*なんかを作ったりできるだろう。下位単位は「実在(*réalité*)」だといっている。これが、ソシュールの立場だ。これは、ポップ派の擁護になるだろうか。ぜんぜん、なりはしないのである。私たちは、話すときに下位単位という部品で「語」を製造しているのではない、それは新学派のいうとおりだろう。ということは、そういう下位単位は、結合の部品として私たちに与えられていない、あるいは存在していないということだ。私たちは、下位単位を結合させているのではない。ひとつの言いかたをすれば、それらを画定しているのだ。「意識する」とは、そのことにほかならない。つまり画定によってそれらを絶えまなく生み出すことにほかならない。

下位単位の<画定>と<結合>は、およそちがったふたつのことだろう。前者は不断の産出だが、後者は産出されるものの使用である。ソシュールのいう「意識」は、画定だけにかかわっている。そこが、時枝誠記との本質的なちがいだ。「意識」は、画定についての意識でもなければ、画定のはたらきとなる意識でもない。彼が持ちだしているのは、そんな心理主義的解釈ではない。「意識」は、そのまま画定される下位単位である。これは、何をいっているかということ、下位単位は「意識」とでも呼ぶほかない、一種の言語的<質>だという意味だ。そういう<質>として、下位単位は不断に発生する。むろん *-eur* は *chant-* との<関係>で成り立つのだし、*pens-eur* や *port-eur* との<関係>も不可欠だろう。けれども、その<関係>は、*-eur*を生むものであると同時に *-eur* が生んだものである。その<関係>が実在するのは、*-eur* という<質>の発生が、必然的に他の<質>とのさまざまな差異を引きおこすからだ。差異が起こらなかつたなら<質>が生まれることはない。しかし、生まれてくる<質>がなかつたなら、存在する差異というのは、理解しようのない観念ではないか。質は質の差異であると同時に、差異もまた差異の質でなくてはならないのだ。

ソシュールが「意識」だの「実在」だのを持ち出すのは、古くさいメンタリズムの名残りでない。これらの言葉は、彼の最後の一般言語学講義にいたるまで、重要な

文脈のあちこちに顔を出しつづける。しかし、彼が「意識」を説明した箇所はどこにもない。それこそが、重要な点であって、じつは彼だってこんな言葉は少しも信用していないのだ。何ならもっと古くさい言葉もあるので、たとえば同じ草稿のなかに、「語る主体の感情のなかにあるものは、みな実在の現象だ」⁹⁾ とういのかたがある。「感情」は「意識」と同じ意味だが、たぶん彼がまだしもましだと思っていたのは、むしろこっちのほうだろう。これも彼が使いつづける言葉になる。「感情」は何かについての感情ではない。感じる主体と感じられる対象の分裂が、まだここにはない。言語事象が実在するとは、そういう質的感情が不断に発生することだ。感情の差異の質が発生することだ。

ところで、ポップたちのまちがいは、下位単位を結合単位と考えたことだけにあるのではない。それらの発生を考えずに、ただ与えられた部品のように下位単位を操作したことにある。だが、実際には下位単位の結合操作は話し手のなかに存在しない。あるとしたら、それは類推による新語の形成になるか、下位単位そのものが「語」といえるほどの「表意性の度合 (degré de significativité)」を持つときだ。「何らかの度合で」意識される、感じられる、そういうことをソシュールは頻繁にいう。もちろん、何の定義も説明もなしに。けれども、この「度合」こそ、彼の「言語学」が<質>の問題に深く捉え込まれていることを示す言葉なのだ。この「度合」は、いうまでもなく量の計測値なんかではない。ひとつの<質>が、その質であることの度合、緊張していく他の質との差異の度合、そういっていいものだ。たとえば、画定される *re-* という下位単位には、それがひとつの質であることのさまざまな度合、差異の緊張の度合がある。 *refaire* (再びする)、 *redoubler* (二倍にする)、 *redouter* (おびえる) では、 *re-* がひとつの事象であることの「度合」が、それぞれ異なっている。 *redouter* のなかでは *re-* はほとんど現われるか現われないかだが、連合系列における *douter* や *refaire* との質の差異が、あるいは差異の質の同一性が、かろうじてそれをひとつの事象に、ひとつの「意識」、ひとつの「感情」にしている。画定が起こるとは、「何らかの度合」での言語的<質>の発生が起こることだ。

質にとっては、それが緊張弛緩する「度合」は不可欠なものである。これは、言語的<質>であろうと、質一般であろうと変わりがない。質一般については、おそらくベルグソン以上にそのことを詳細に語った人間はいないだろう。こういう人が、いま日本でもフランスでも忘れられたようになっているのはおもしろいことだ。関係論が与える奇怪な呪縛について、私たちはもうそろそろ考え直してもいい。学問が成功しすぎることの不思議さについても、もう一度考えてみたほうがいい。言語学における二項対立主義のはなばなしい成功と、中期以後のソシュールの悲痛な沈黙は、あんまり鮮やかな対比ではないか。その不思議さを考えてみたほうがいいというのだ。彼が関係論を完成させられなかったのは、いまの学者より馬鹿だったせいでも、時代の壁が厚かったせいでもない。彼においては、言語的<差異>は、それを認識するが

わからいえばたしかに<関係>だが、その直接な存在のしかたを語れば<質>なのである。この<質>には、それが<質>であることのみさまざまな度合があり、こうした度合の測定不可能な伸縮こそ、言語がシステム性を形成する力となる。ソシュールが考えていたのは、そんなことだ。いうまでもなく、これは二項対立で成り立つ世界ではない。そこに踏み込めば、たぶん「言語学」というものがとてつもなく困難になる世界だ。けれども、「言語学」がどうであったって、私たちにはいいわけだ。言語について考えること、あるいはそれについて書くことが、私たちにとって根底的な何事かであるためには。

注

- 1) *Cours de linguistique générale*, Payot, Paris, 1916, p.169.
- 2) Ms.fr. 3951, N.9-1. ENGLER の校訂本 *Cours de linguistique générale* (Otto Harrassowitz-Wiesbaden, 1967) のフラグマン番号 1976。
- 3) 第二、三回の一般語学講義では、「音」と「思考」のふたつの「実質」という言いかたが現われるが、これも現実にそういう実質が考えられているわけではない。これらは、いわば権利上仮定される素材概念とでも見るべきものだ。
- 4) Ms.fr. 3951, N.7 Morphologie, p.7. ENGLER の校訂本では、この一節はなぜか欠落している。
- 5) *Ibid.*, p.10. ENGLER の校訂本 fascicule 4, p.18 左段に収録。